青年における孤独心性①

——孤独感尺度（LSO）と東大式エゴグラム（TEG）による検討——

中　川　純　子

Mentality of Loneliness in Adolescents ①

——Investigation with Loneliness Scale by Ochiai (LSO) and Tokyo University-style Egogram (TEG)——

NAKAGAWA Junko

問　題

孤独感を持つのは主観的にはつらく苦しい体験である。自我を確立していく過程では，「自」と「他」をより明確に分離しながら意識し，「自」がひとりであることを認識し，「他」が存在することを意識した上で起こる関係性の変化を認識していくが，その時孤独感は避け得ないものである。またそれゆえ，孤独感を持つことは自我を確立する上で必ずしもマイナスの意味を持つとは限らない。つらい，苦しい孤独感の経験が，その後の「自」「他」のあり方のために肯定的なものとなることができるのではないだろうか。

以上のような観点から，ここでは，孤独感の基本的な定義をひとまず「自他が別々であるという分離意識と分離感情」とする。

〈従来の孤独感の実証的な心理学的論究〉

従来の実証的な研究では，「孤独」という人間存在のあり方，現象よりも，「孤独感」という主観的感情に主眼点がおかれてきた。

孤独感の定義には次のようなものがある。Weiss (1973), Peplau & Perlman (1979), Sermat (1980) 等によるもの。これらの定義の共通点は，「1．孤独感は人の社会的関係の不足から生じるものである。2．孤独感は主観的な経験であり，したがって客観的な社会的孤立（social isolation）と同義ではない。3．孤独の経験は不快で苦悩を与えるものである。」と Peplau & Perlman (1982) によりまとめられている。

以上より，これらの定義における孤独感は，孤独感の不快な否定的な面を取り上げていることがわかる。

以上の定義に基づく孤独感尺度として，UCLA 孤独感尺度（Russell, D., et al., 1978／改訂

版；Russell, D., et al., 1980／日本版；工藤・西川，1983), Differential Loneliness Scale; DLS（Schmidt, N. & Sermat, V., 1983／日本版；広沢・田中，1984）等がある。孤独感の否定的側面の実証，統計的研究はこれらの尺度を用いてすすめられてきた。しかし，孤独感を経験したことによって得る，自我を確立する上での肯定的な変化，を見る立場は切り落とされたままである。

〈孤独・孤独感への肯定的見解〉

Moustakas, C.E.（1961）はその著書『孤独』で次のように述べている。「孤独が人間生活の条件であり，また，孤独は人に人間性を保持させ，広げさせ，深めさせる人間たる経験である……人間は結局，常に孤独なのです。すべての人が自分の孤独に気づき，結局人間はあらゆる面で孤独であることに目覚める努力をする必要があると私は信じます。」実存主義者であるMoustakasは，クライエントに対する臨床的な研究に基づいて孤独感に関する考察を行なっており，孤独感に打ち勝つことと，孤独感を積極的に生かす方法を学ぶことをすすめている。

また彼は現代生活の孤独を「孤独不安」「実存的孤独」の2通りに分けて考えている。「孤独不安」は，「漠然とした，かき乱すような不安としてある自己疎外，自己拒否の孤独」で，虚無感，劣等感，攻撃性，個性をすててまでの依存等の原因となっていくものである。「実存的孤独」は，「真実の体験の中において避けることのできない本当の孤独」で「真実の自己意識を保持していれば……孤立は励ましとなり，より深い感受性と意識性を導きだ」すもので創造力の源となっていくものである。

ここにいう「孤独不安」が先述の実証的研究で取り上げられた孤独感の否定的な側面であると考えられる。

孤独感の否定的な側面についての見方と共に，孤独・孤独感への肯定的な見解が反映されていると考えられる日本の研究に落合の一連の研究がある。

〈落合による孤独感の構造の研究〉

落合（1982）は孤独感を「自分（又は人）が孤独（ひとり）だと感じること」と定義し，手記とSCTを資料として孤独感の内包的構造に関する仮説を立てている。それによると孤独感の心理的規定因には対他的次元，対自的次元，時間的展望の次元があるとしている。ここで対自的，時間的展望の次元はその内容から見て先述のMoustakasによる実存的孤独に特に関わると考えられる。

これに基づき落合（1983b）は孤独感尺度LSO（Loneliness Scale by Ochiai）を作成した。これは青年期の孤独感を対他的次元（LSO-U），対自的次元（LSO-E）の2軸により4類型に判別する16項目，5段階評定の尺度である。4類型の特徴は，A型；人間同士は理解可能と感じ，人間の個別性に気付いていない，B型；人間同士は理解できないと感じ，人間の個別性に気付いていない，C型；人間同士は理解できないと感じ，人間の個別性に気付いている，D型；人間同士は理解できると感じ，人間の個別性にも気付いている，である。

中川（1991）は，LSOによるD型がそれ以前の孤独感の経験により，新たな視点を肯定的な

方向に形成できた群であると考えた。そこで個人間比較により，青年期前期から後期後半にかけて孤独感の型はA型からD型へ移行すること，また孤独感の経験による，対人関係，自己への視点の肯定的な変化はおそらく「個別性・独自性の認識」「他者との関係に情緒的安定を見いだす」といったことが契機になることが示された。

本研究でもLSOによるD型がそれ以前の孤独感の経験により，新たな視点を肯定的な方向に形成できた群であると考え，孤独感尺度LSOを用い，孤独心性の構造の検討を進めるものとする。

LSOによる孤独感の構造が，発達的に、かつ個人個人の体験により変化していくものなら，それは人格次元の特徴の変化とどう対応するであろうか。

本研究では，そのパーソナリティ次元の特徴を，交流分析を背景とする「エゴグラム」によって見ることとした。

交流分析（Transactional Analysis）は，アメリカの精神科医Berne，Eが1959年頃から唱えはじめたもので，自己への気付きを増すこと，自律的な生き方をすること，真実の交流を回復することなどを目的とする分析法である。

人の心には3つの自我状態P（CP，NP），A，C（FC，AC）があり，必要に応じて3つのうちの1つが主導権を握る。エゴグラムはそれら各々の「自我状態への心理的なエネルギーのわりふり（末松他，1989）」を分かりやすくとらえようとするものである。石川他（1984）によると，3つの自我状態は，親（Parent：P），大人（Adult：A），子供（Child：C）であり，Pは批判的なP（Critical Parent：CP）と養育的なP（Nurturing Parent：NP）に分かれ，Cは自由なC（Free Child：FC）と順応したC（Adapted Child：AC）に分かれる。各々の内容を簡単に述べると以下のとおりである。

CP：批判的な親。父親的な厳しい部分。懲罰的，理想追求的。

NP：養育的な親。母親的部分。受容的，親切の押し売り。

以上，Pは，交流分析では「その人の心そのものよりも，親やそれ以前の世代から引き継いだものが心に根づく（末松他，1989）」と解釈されているものである。

A：大人。客観的に判断しようとする部分。統合的，または無味乾燥。

FC：自由な子供。躾の影響を受けていない部分。直観的，自己中心的。

AC：順応した子供。周囲に気兼ねをする部分。主体性欠如，消極的。

以上，Cは「明るく積極的な部分と周囲に気を使う消極的で暗い要素を兼ね備えている（末松他，1989）」。

以上の自我状態の強さを得点化して表すのがエゴグラムである。また，各得点のバランスにより，個人が自分と他人の関係に対してとる基本的な構えが推測される。基本的な構えには1．自己肯定・他者肯定，2．自己否定・他者肯定，3．自己肯定・他者否定，4．自己否定・他者否定の4種類がある。

本研究で利用した東大式エゴグラム（TEG）は，石川他（1984）によるもので，正常成人4042人を母集団として標準化がなされている。

目　　的

孤独感尺度（LSO）と東大式エゴグラム（TEG）によって，青年期後期における孤独心性の構造的検討を行なう。

方　　法

質問紙の内容

a）孤独感類型判別尺度（LSO）：落合（1983b）による。対他的次元尺度（LSO-U，9項目）と対自的次元尺度（LSO-E，7項目）からなる16項目5段階評定の尺度。

b）東大式エゴグラム（TEG）：石川他（1984）によるもの。5つの自我状態を測定する尺度（CP：批判的な親，NP：養育的な親，A：大人，FC：自由な子供，AC：順応した子供）と，妥当性尺度として社会的偏位度を測定する尺度（D），疑問尺度（Q）からなる60項目3段階評定の尺度。

被検者

国・私立大学の大学生（男78名，女122名，計200名）。年齢は男（18～29歳，平均22.1歳）女（18～26歳，平均20.0歳），全体の平均年齢は20.8歳であった。

調査時期・形式

1989年11月5～20日。一部で集団法・強制回収の形式がとられたが，あとはアンケート法。全体での回収率は79.1％。無記名で実施した。

結　　果

1．結果の整理

a）LSO…各項目の得点（1～5点）は，LSO-Uは，人間同士は理解・共感できると感じているほど高得点に，またLSO-Eは，個別性に気付いているほど高得点になるように採点した。

b）TEG…各項目の得点（0，1，2点）は，各尺度の内容に該当するほど高得点になるように採点した。

2．LSOの検討

全16項目を全被検者200名をもとに各次元ごとに項目のGP分析（上位群下位群各49名ずつを利用）を行なったところ，全項目が0.1％以下の危険率で弁別力をもつことが判明した。したがって以降のLSOの得点には全16項目を用いた。

3．LSOについて

a）LSO-U，LSO-E得点…LSO-U，LSO-E得点の平均値，SDを表1に示した。各得点の年齢，性別を要因とする分散分析は，各主効果，交互作用とも有意ではなかった。以上より，青年期後期群内ではLSO-U得点，LSO-E得点は，性差，年齢差共に認められないことがわかった。

b）LSOによる孤独感の類型判別…LSO-Uは27点（range 9～45点），LSO-Eは21点（range 7～35点）で，被検者を4分割し各類型に分類した結果を表2に示した。ここでA，B，C，D

は孤独感の型でA（LSO-U高，LSO-E低）B（LSO-U低，LSO-E低）C（LSO-U低，LSO-E高）D（LSO-U高，LSO-E高）である。またその他は，LSO-Uが27点またはLSO-Eが21点で，分類不可能な被検者の群である。性別による型の分かれ方に有意差は見られなかった（χ^2=4.59，df＝3，n.s.／期待度数の条件を満たさせるためB型とその他のマス目を合併），年齢による型の分かれ方にも有意差は見られなかった（χ^2=2.33，df＝4，n.s.／期待度数の条件を満たさせるためB，C型とその他のマス目を合併）。

4．TEGについて

CP，NP，A，FC，AC，D，Qの各尺度の得点の性別による平均値，SDを表3に示した。各尺度についての年令，性別を要因とする分散分析では，A得点のみ男＞女（男：11.14 SD 4.08 女：10.03 SD 3.70 df＝1，F＝4.30，p＜.05）で，他は性差，年齢差共に認められなかった。

5．LSOとTEGの関連

a）LSO，TEGの各下位尺度の相関…表4 a-c参照。これより，対象群全体については，他者と理解・共感できると思うほど（LSO-U＋），合理的で事実に基づき客観的に判断しようとし（A＋），他人を認め思いやりをもって接し（NP＋），友好的で他人の批判，攻撃などせず（CP－），他人に惑わされない（AC－）という関係のあり方が見られた。このTEGの下位尺度で示され

表1．LSO-U，LSO-E得点の平均値とSD

LSO＼	平均	SD
LSO-U	35.9	9.5
LSO-E	24.8	5.7

表2．LSOによる孤独感の類型分類

性＼型	A	B	C	D	その他	計
男	17	1	5	49	6	78
女	14	0	6	86	16	122
計	31	1	11	135	22	200

表3．TEG下位尺度別得点平均値，SD

		CP	NP	A	FC	AC	D	Q
男	平均	8.54	12.38	11.14	10.68	11.47	15.72	18.53
	SD	4.06	4.22	4.08	3.65	4.49	2.81	10.29
女	平均	7.86	13.41	10.03	11.22	12.51	17.00	20.74
	SD	3.85	3.35	3.70	3.83	4.14	2.13	8.46
全体	平均	8.13	13.01	10.47	11.01	12.11	16.50	19.87
	SD	3.95	3.75	3.89	3.77	4.31	2.50	9.28

表4 a. LSO・TEG 下位尺度相関係数（男）

LSO\TEG	CP	NP	A	FC	AC
LSO-U	-0.089	0.420***	0.210△	0.061	-0.391***
LSO-E	-0.148	-0.284*	-0.073	-0.004	0.094

表4 b. LSO・TEG 下位尺度相関係数（女）

LSO\TEG	CP	NP	A	FC	AC
LSO-U	-0.224*	0.267**	0.364***	0.011	-0.352***
LSO-E	0.213*	0.066	0.081	0.200*	0.075

表4 c. LSO・TEG 下位尺度相関係数（全体）

LSO\TEG	CP	NP	A	FC	AC
LSO-U	-0.170*	0.347***	0.279***	0.036	-0.356***
LSO-E	0.041	-0.092	-0.004	0.118△	0.095

△…p<.1 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

る特徴は社会的適応性に関わるものだといえよう。

特徴的であったのは，各下位尺度についての基本統計量に性差が見られなかったにもかかわらず，男女では多少相関のあり方が異なることである。男子では NP 点が，LSO-U と有意な正の相関を持ち，LSO-E と有意な負の相関を持った。女子では CP 点が，LSO-U と有意な負の相関を持ち，LSO-E と有意な正の相関を持った。

このことより，LSO-U，E 共に得点が高い，つまり孤独感の分類の D 型寄りに分類される人々は，男子では NP 点，女子では CP 点が極端に高すぎも低すぎもしない範囲内にあることが考えられ，その点の吟味が必要とされるだろう。

b）LSO による孤独感の型別の TEG の平均値（プロフィール）の特徴

TEG の下位尺度ごとに性別，LSO の型を要因とした分散分析を行なったところ，NP，AC では LSO の型の間に有意な差が認められ（NP：LSO 型因 $F=3.72_{*}$ df＝2／A，D＞C 型，AC：LSO 型因 $F=3.63_{*}$ df＝2／C＞D，A 型），A では性差が傾向として見られた（A：性別因 $F=3.81_{+}$ df＝1）。プロフィールによる特徴としては，LSO の A，D 型ではほぼ平坦型となり，LSO の C 型のプロフィールは，男は NP 点が低い V 字型，女は A 点が低い V 字型となっている。（図1，2参照）

図1．TEGエゴグラム・プロフィール
(男子)

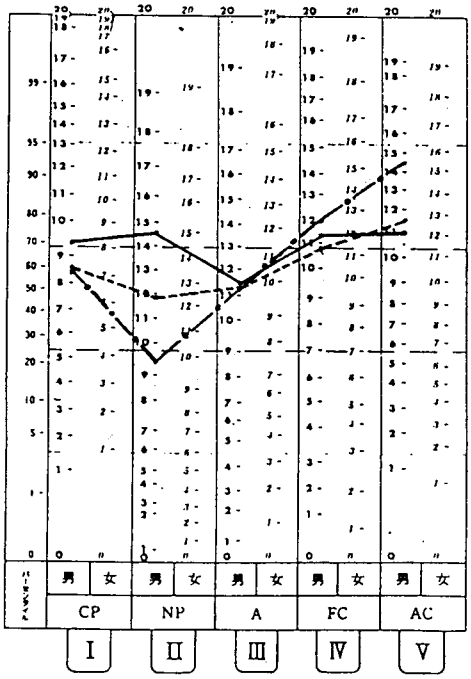
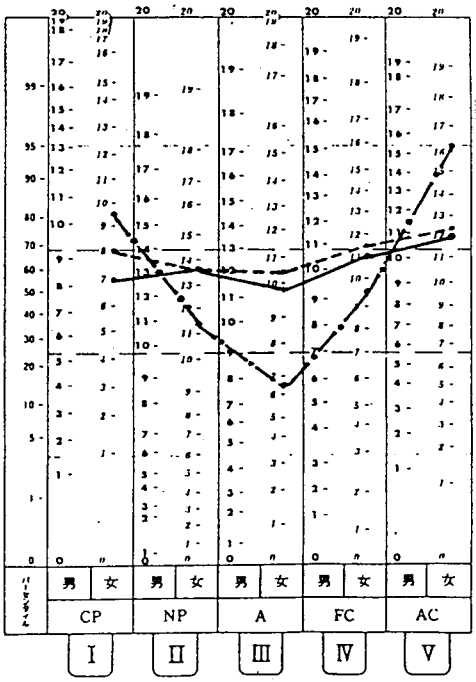


図2．TEGエゴグラム・プロフィール
(女子)



—— A 型
—•— C 型
----- D 型
のプロフィールを示す

c）LSO による孤独感の型別の TEG のパターン分類

LSO の孤独感の型別に，各被検者のエゴグラムのパターン分類を行なった（表5）。各パターンは末松他（1989）にならい，エゴグラムの相対的な高低により17パターン（下位分類も入れると27パターン）とした。

ここでパターン2，3，4，11を合併し，そのエゴグラムの特徴から山型と名付け，孤独感の型による差異を検討するためχ^2検定を行なったところ（表6），孤独感の型により，山型の現れ方が異なることがわかった。残差分析による検定により，LSO の A 型において，他の型と比較すると，より山型が多いことが示された。

また，パターン7，8，9，12を合併し，そのエゴグラムの特徴から谷型と名付け，孤独感の型による差異を検討するためχ^2検定を行なったところ（表7），孤独感の型により，谷型の現れ方が異なることが示された。残差分析による検定により，LSO の他の型と比較して，LSO の C 型では谷型がより多く現れ，LSO の D 型では谷型がより少なく現れることが示された。

表5．LSO型別TEGパターン分類　単位(人)

TEGパターン ＼ LSO型	A	B	C	D	その他	計
1. CP優位型	1	0	0	5	2	8
2. NP優位型	4	0	0	4	1	9
3. A 優位型	2	0	0	5	2	9
4. FC優位型	4	0	0	8	1	13
5. AC優位型	0	0	1	12	0	13
6. CP低位型	2	0	0	6	2	10
7. NP低位型	2	0	4	6	3	15
8. A 低位型	2	0	1	9	1	13
9. FC低位型	2	0	0	7	2	11
10. AC低位型	0	0	0	8	0	8
11a. 台形型(NP, A, FC高)	1	0	0	2	0	3
11b. 台形型(NP, A高)	0	0	0	4	0	4
11c. 台形型(A, FC高)	0	0	0	0	0	0
12a. U型(NP, A, FC低)	0	0	1	4	1	6
12b. U型(NP, A低)	2	0	0	1	0	3
12c. U型(A, FC低)	0	0	1	2	0	3
13a. N型(NP高, A低)	1	0	1	7	1	10
13b. N型(NP高, FC低)	1	1	0	4	0	6
13c. N型(A高, FC低)	1	0	0	4	0	5
14a. 逆N型(NP低, A高)	1	0	0	4	0	5
14b. 逆N型(NP低, FC高)	0	0	0	6	0	6
14c. 逆N型(A低, FC高)	1	0	0	2	0	3
15. M型	0	0	0	3	0	3
16. W型	0	0	0	4	1	5
17a. 平坦型(高位)	0	0	0	0	0	0
17b. 平坦型(中位)	4	0	2	18	3	27
17c. 平坦型(低位)	0	0	0	0	1	1
無回答	0	0	0	0	1	1
計	31	1	11	135	22	200

表6．LSO型別TEGパターン（合併後1）　単位(人)

TEG型＼LSO型	A	D	その他	計
山型(2, 3, 4, 11)	11	23	4	38
その他	20	112	30	162
計	31	135	34	200

χ^2=6.967 df=2 p<.05　※LSO-B, C型はその他に合併

表7．LSO型別TEGパターン（合併後2）　単位(人)

TEG型＼LSO型	A	C	D	その他	計
谷型(7, 8, 9, 12)	8	7	29	7	51
その他	23	4	106	16	149
計	31	11	135	23	200

χ^2=9.865 df=3 p<.05　※LSO-Bはその他に合併

考　　察

1．LSO について

LSO-U 得点，LSO-E 得点，孤独感の型の分かれ方共に性差，年齢差は認められなかった。LSO は青年期の孤独感の構造を元にした類型判別尺度であるので，青年期後期の細区分はいずれにしても今後に残された問題であろう。

2．TEG について

A 得点にのみ性差が見られ，男子＞女子であった。全体的に見て，男子の方が女子より合理的，理性的，平等，公平に物事を評価しようとすることが分かる。

今回は他の得点には，性差・年齢差共に見られなかった。TEG を標準化する時の資料によれば性差は明確にあらわれている。成人男女4042人では，男性は CP，A 得点が高く，女性は NP，FC 得点が高い（石川他，1984）。この違いは，今回の被検者が，標準化時の様々な集団の集まりである被検者群とは異なり，全員が学生であったことにも一因があるかもしれない。エゴグラムが職業，立場などにより異なってくることは，職業別，役職別のエゴグラムの比較により示されている（新里他，1986）。

3．LSO と TEG の関連について

a）LSO，TEG の各下位尺度の相関

中川（1991）により，青年期前期から後期にかけて孤独感の型は A 型から D 型へ移行していくことが示された。これと，LSO と TEG の相関関係を考えあわせると以下のように推測される。

男子の場合を考えると，NP（養育的な親）とは，内面化された親の関わり方であり特にその中の養育的な要素を示すものである。青年期前期に多い A 型は LSO-U が高く LSO-E が低いので，TEG の得点の方向は NP が高いことが予想される。一方後期になると D 型が多くなり，それは LSO-E が高くなる人が多くなることと対応していく。NP 得点は，LSO-E にも関連しており，LSO-E が高いと NP は低い。それまでの NP の養育的な母親的要素への依存度が高かったのに比して，以後は NP の比重を様々にしていくのではないだろうか。その際に NP の占める位置が小さすぎる場合には，その人々のもつ孤独感は C 型の孤独感と関連していくことが考えられる。NP 要素を適当範囲に保ち得ることと D 型との関連は吟味に値すると考えられる。

女子の場合は，CP と LSO-U，LSO-E との関連が同様に問題となる。CP（批判的な親）とは，やはり内面化された親の関わり方であり特にその中の批判的な要素を示すものである。青年期前期に多い A 型では，上記と同様 CP が低いことが予想される。また D 型が多いことは，LSO-E が高く，それと関連する CP が高いことと対応する。権威的・支配的な父親的要素に比重をかけることが，女子の場合，分離，個別化の過程で重要な意味を持つことをここから読みとるべきなのかもしれない。

b）LSO による孤独感の型別の TEG の平均値（プロフィール）の特徴

A，D 型が示している平坦型のプロフィールは，個性はないが適応の良い型とされている（末

松他，1989)。

またC型はV字型のプロフィールを示している。末松他(1989)によると，V字型の特徴は「CPの値が高いことで，批判力，不満は十分に持っているにもかかわらず，高いACによって周囲の顔色をうかがってしまい，思うように自己主張ができない点」である。またそのうちNP低位型の特徴は「思いやりに欠け相手の立場を考えることができず，追求と攻撃抑制の葛藤を深めることが多い（末松他，1989)」。「この状態を修正するにはNPを育てること」と末松他（1989）は示唆しており，先の3-aでの考察と重なるものがある。またA低位型は「問題解決能力が低く，葛藤のうちに混乱状態となり実現不可能なことを空想し悶々とする（末松他，1989)」。「この状態を改善するにはAを育てること」であるが，これは男子よりもA得点の低い女子においてより問題になる点であろう。

c）LSOによる孤独感の型別のTEGのパターン分類

エゴグラムには，5つの自我状態の強さを相対的な高低として視覚的につかめるという利点がある。あるひとつの自我状態の得点が高いか低いかというのもひとつの見方ではあるが，5つの自我状態の相対的なバランスも有益な情報となる。

各被検者のエゴグラムのプロフィールをパターン分類した結果は，やはり広範にわたりバラエティに富んだもので，本研究の被検者集団が様々なパーソナリティの人々を含んでいたことが分かる。表5を一見しただけでは，孤独感の型による特徴ははっきりしないが細分化したパターンを集めることにより特徴がある程度見いだされた。

山型として合併したTEGパターン2，3，4，11は共通点として相対的にCP，ACが低く，NP，A，FCはある程度高いことがあげられる。このことから，山型のプロフィールをもつ人は，やさしく受容的であり（NP＋，CP－），冷静な判断力と行動力をもち（A＋，FC＋），やや協調性に乏しい（FC＋，AC－）人と推測される。このタイプがLSOのA型に多いことから，A型の人によくあるパターンのひとつがこういうタイプであるといえよう。A型は“人間はひとりではない，他人と理解，共感はできる”というどことなく自己中心的な特徴をもっている。ACは“他人の目を気にする，周囲の反応を気にする”といったエネルギーの使い方を示すが，これが低い，つまりあまり他人の目を気にしないという山型の特徴とA型の特徴が重なるのかもしれない。

また，谷型として合併したTEGパターン7，8，9，12は共通点として相対的にCP，ACが高く，NP，A，FCはある程度低いことがあげられる。このことから，谷型のプロフィールをもつ人は，高い理想を持ち批判は厳しく（CP＋，NP－），周囲に気を使い慎重であるが（AC＋），事実を客観的に判断しにくく，自己主張もできにくい（A－，FC－）人と推測される。このタイプがLSOのC型に多いことから，C型の人によくあるパターンのひとつがこういうタイプであるといえよう。また，LSOのD型には少なかったことから，D型の人にはあまりないパターンのひとつといえよう。平均値でもC型はV字の谷型がプロフィールに現れた。C型は“人間は結局ひとりであり，他人と理解・共感し合うことはできない”という孤立・絶望感の強い孤独感を持つ。TEGプロフィールの谷型の特徴である批判力の強さや，自己主張ができず周囲に気を使うところなどが，LSOのC型の特徴と重なる点があるといえるかもしれない。

4．総合的考察

以上のように，LSO と TEG から，青年期後期の孤独感の構造的検討が行なわれた。その結果，LSO と TEG の相関についての考察により，青年期の孤独感の構造は，男子では養育的な自我状態（NP），女子では批判的な自我状態（CP）が関係しており，それらの自我状態を適当な強さの範囲に保ち得ることが，肯定的な孤独感を持つことと関係があることが示唆された。

今後は孤独感の研究にこのような母性的なもの，父性的なものとの関わりを見る研究姿勢も，とくに思春期，青年期を焦点とするなら大切になってくると考えられる。

また，LSO の孤独感の型別平均値で TEG のプロフィールを描いたところ，C 型に V 字プロフィールという特徴が見られ，A・D 型は平坦型で差が認められなかった。これにより，C 型は社会的適応はあまりよくないことが示された。またこの平均値には差が出なかった適応的であるとされた A，D 型の間でも，細かくプロフィールのパターンを見てみると，A 型には山型が多く，D 型には谷型が少ないといった特徴が見られた。孤独感の型が発達的に A 型から D 型に移るのであれば（中川，1991），以上からその構造の変化に関与するもうひとつの自我状態には AC が考えられる。AC は“他人の目を気にする，周囲の反応を気にする”といったエネルギーの使い方を示し，抑圧的であまり評価のよくない部分ではある。しかしこれが他に比して低すぎると，自己中心的であまりに他人の目を意識しないことになり，“他者との情緒的な交流”が成り立ちにくく，一方通行になってしまうこともあるのではないだろうか。もちろんこの AC が強すぎても（例・谷型），抑圧的になりやすく，適度な自己主張さえできなくなり，孤独感は厳しいものとなろう。

青年期後期における肯定的な孤独感は，他と比べてエゴグラムのパーソナリティ次元では特徴が見られた。それは，内面化された母性性，内面化された父性性，社会的順応性の諸要素の相互的な比重のあり方と関わりをもつことが認められたので，今後その面での検討が望まれるところである。

引用文献

石川　中　和田迪子　十河真人　伊藤たか子　1984　TEG〈東大式エゴグラム〉手引き　金子書房

Moustakas, C.E.　1961　Lonliness. Prentice-Hall; Inc.（飯鉢和子　訳　1972　孤独－体験からの自己発見の研究　岩崎学術出版社）

中川純子　1991　青年期における孤独感の意義―孤独感と主観的自己像を通じて―　日本教育心理学会第33回総会発表論文集　285－286

落合良行　1982　孤独感の内包的構造に関する仮説　教育心理学研究　30－3　69－74

落合良行　1983b　孤独感の類型判別尺度（LSO）の作成　教育心理学研究　31－4　60－64

Peplau, L.A. & Perlman, D.（Eds.）1982　Lonliness　（加藤義明　監訳　1988　孤独感の心理学　誠心書房）

新里里春　水野正憲　桂　戴作　杉田峰康　1986　交流分析とエゴグラム　チーム医療。

末松弘行　和田迪子　野村　忍　俵里英子　1989　エゴグラム・パターン―TEG 東大式エゴグラムによる性格分析―　金子書房

（博士後期課程）